



日本古代ニ於ケル人民ノ移住ニ就キテ(其六)

内田, 銀藏

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 5(3):381-394

(Issue Date)

1908-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00051302>



日本古代ニ於ケル人民ノ移住ニ就キテ (其六)

京都文科大學教授

文學博士 內田 銀藏

第六 所謂日本種族ニ屬スル人民ノ移住ノ二

朝廷ニテ屯倉ヲ建置セラレタルコトハ、早ク日本紀卷六垂仁天皇二十七年ノ條

是歲興屯倉于來日邑ニ屯倉此云フ
彌夜氣

同書卷七景行天皇五十七年冬十月ノ條ニ

令諸國興田部屯倉ヲ

マタ古事記景行天皇ノ段ニ

此之御世定田部又定東之淡房○安水門又定膳之大伴部又定倭屯家ニ

ナド見エタリ。サレバ其ノ起原ハ頗ル舊キモノナリト云フベシ。屯倉ニハ其ノ管理
ニ屬スル田地アリテ、之レヲ耕作スル人民ヲ田部トイヘリ。(一) 而シテ屯倉ヲ設置

スルニ當リ其ノ田地ノ耕作者、即チ田部ニハ、其ノ近傍ニ從來居住セルモノヲ以テ之ニ充テタリヤト云フニ、必ラズシモ然ラズシテ、遠方ヨリ人民ヲ徵集シ來リテ之ニ充テタルコトマタコレアリシモノ、如シ。播磨風土記、飭磨郡貽和里ノ條下ニ於テ飭磨御宅ノ由來ヲ說ケル所ニ據ルニ、仁德ノ朝、此ノ屯倉ヲ置カレシトキニハ意伎、[○]出雲、伯耆、因幡、但馬ノ五ヶ國ノ人民、之ヲ開墾シタルモノ、如ク見ユ。又同書揖保郡枚方里佐岡ノ條ニ

佐岡、所以名佐岡者、難波高津宮、天皇[○]仁之世[○]召筑紫田部令墾此地之時、常以五^{ツキヲ}月集聚此岡飲酒宴故曰佐岡、

トイフ傳説アルナドヲ思ヒ合ハストキハ、上古ノ世、土地ノ開墾ヲ企ツルトキニ、頗ル遠隔ノ地ヨリ人民ヲ移シ來ルコトアリシヲ推察スベキナリ。屯倉設置ノコトハ上古ノ時代特ニ其ノ終リニ近キ頃、即チ安閑天皇及欽明天皇ノ御世等ニ於テ多クコレアリシコト、史上ニ其ノ記載アリ。^(二)而シテ此等ノ場合ニ於テ或ハ韓人ヲ以テ其ノ田部ニ充テタル例モアリシコトナレドモ^(三)遠近ヨリ内地人ヲ徵集シテ以テ其ノ耕作者タラシメシコトハ、蓋シ最モ普通ニ行ハレタル所ナルベシ。臣連、伴

造國、造村、首等ガ處々ニ田莊

孝德紀大化二年ノ條ニハ之ヲ「タトコロ」ト訓ミ、同白雉元年ノ條ニハ之ヲ「ナリトコロ」ト訓メリ。

ヲ設クルヤ、マタ同様

ニ遠邇ヨリ人民ヲ集メ來リテ以テ其ノ開發ヲ計リシコトナラン。夫レ屯倉及ビ田莊ノ設置ハ之ヲ經濟上ヨリ考察スレバ、即チ日本上古ノ世ニ於ケル大仕掛ノ企業ノ適例タルニ外ナラズ、而シテ是レニ由リテ土地ノ開拓ノ進歩、耕作反別ノ増加ヲ計ル爲メニハ、人民ヲ他ヨリ其ノ地ニ招集誘致スル必要アリ、從テ是レハ人民ノ移住ヲ致ス一ノ特別ナル因由トナリ、屯倉及田莊ノ所在地ハ、幾多ノ場合ニ於テ、内國ニ於ケル小殖民地ノ觀アリシナラント思ハル、ナリ(四)

(一) 屯倉、屯家、御宅、何レモ「ミヤケ」ト訓ム、文字異レドモ同ジコトナリ。屯倉及田部ニ就キテハ、本居宣長大人ノ古事記傳二十六ノ卷、栗田寛先生ノ郷名同唱考(栗里先生雜著卷十一、一二三八頁以下)、星野恒先生ノ守護地頭考(史學會雜誌第二編八一五頁)等、宜シク併セ攷フベシ。古事記傳ニハ、茲ニ引用セル垂仁紀ノ文ヲ擧ゲテ「これ屯倉の始めて見はたるなり、但し屯倉、此より始まるには非ず、此より先にも舊よりありはしけむ」ト云ヒ、マタ景行紀ノ文ノ訓法ニ就キテ「此は田部と屯倉となり、さればタベノミ訓るは非ず」トイヘリ。

(二) 日本紀卷二十二、推古天皇十五年ノ條ニモ亦毎國置屯倉トアルヲ思ヒ合ハスベシ。
(三) 日本紀卷十九、欽明天皇十七年ノ條ニ、倭國高市郡ニ於テ韓人矢身狹屯倉高麗人小身狹屯倉ヲ置クト云フコト見エ、其ノ分註ニ韓人トハ百濟ナリ、處々ノ韓人ヲ以テ大

身狹、屯倉ノ田部ト爲シ、高麗人^チ以テ小身狹、屯倉ノ田部ト爲ス、是レ其ノ名アル所以ナリトイヘリ。サレバ韓人^チ以テ屯倉ノ田部ニ充テタルコトモ勿論コレアリシ也。

(四) 或ハ他所ニ住スル人民ヲシテ耕作及收納ノ時ニ屯倉ニ來リテ勞働セシメタルコトモコレリアシナラン。然レドモ諸國ヨリ田部ヲ徵集シテ屯倉ニ屬スル田、即チ所謂屯^{ミタ}田^タヲ耕作セシメタリトスレバ、彼等ハ屯倉若シクハ其ノ附近ニ寄住若シクハ土着シタルニ相違ナシ。尙ホ日本紀安閑天皇元年ノ條ナドニ就キテ仔細ニ討究スベシ。

奈良朝ヨリ平安時代ニ至リテハ權門勢家、膏腴ノ地ヲ占メ、莊園ヲ建置シテ其ノ開墾ヲ計ルコト盛ニ行ハレタリ。莊園ハ其ノ經濟上ノ性質ニ於テハ、此ノ時代ニ於ケル最モ注意スベキ大仕掛企業ナリシト云フベシ。而シテ莊園制度ノ發達スルヤ人民ハ他ヨリ庄ノ地ニ集リ來ル頗ル強キ傾向アリシナリ。蓋シ庄ハ通常未ダ開拓ヲ經ザル原野若シクハ荒廢セル土地ニ於テ置カレタルコトナレバ、最初ハ新開地ノ性質ヲ有シ國內殖民地トイヒテ不可ナキモノタリシヤ、疑ヲ容レズ。其ノ開墾ノ爲メニハ他ヨリ人民ヲ誘致招來スル必要アリシヤ論ヲ埃タザルナリ。而シテ舊村落ニ於テ人口繁殖シ、人多クシテ田足ラザルニ至ルヤ、過剩ノ人口ハ、自然ニ新立ノ庄ニ赴キテ生活ノ道ヲ求ムルニ至ル、亦當然ノコト、云フベシ。然レドモ中古ノ時

代ニ於テ人民ノ莊園ニ集マルニ至リシハ、此ノ一般ノ理由ニノミヨリシニハ非ズシテ、尙ホ別ニ之ヲ助成セシ特別ノ因由存セシナリ。此ノ事ヲ明ニセント欲セバ、先ヅ中古ノ租税法ヨリ説キ起サバルヲ得ズ。

蓋シ我國中古ノ租税法ハ、人ノ能ク知ル如ク、所謂租調庸ノ法ニシテ、租ハ田地ノ收獲ニ對シ賦課シタルモノナレドモ、調ト庸トハ人頭ニ之ヲ賦課シタルモノナリ而シテ當時ノ租ハ其ノ割合甚ダ輕カリシモ、調ト庸トノ負擔ハ、比較的頗ル重カリキ。(五) 故ニ政府ハ戶籍ヲ設ケ、收税ノ關係上ヨリシテ戶口増減ノ調査ニ頗ル重キヲ措キ、以テ脫漏ナカラシムコトヲ望ミタリト雖、實際ニ於テハ、郷里ヲ去リ、遠ク他國ニ流寓シ、所謂浮宕ノ民、若シクハ浮浪人トナリテ課役ノ負擔ヲ逃ル、モノ頗ル多ク、(六) 其ノ他種々ナル手段ニヨリテ人別賦課ノ調庸ヲ免レント計ルモノ續出シ、其ノ弊遂ニ濟フベカラザルニ至レリ。而シテ莊園ノ地ニ對シテハ、國司、卽チ地方官ノ命令能ク行ハレズ、之ニ居住スルモノハ、其ノ建置者タル權門、貴族ノ勢威ヲ假リテ國司ニ對捍シ、調庸ヲ納メザルモ、國司ハ實際ニ於テ之ヲ如何トモスル能ハザル

有様ナリシヲ以テ、負擔ヲ免レントスル奸民等ハ之ヲ奇貨トシ、莊園ニ集マリ來ルモノ次第ニ多キヲ致セルナリ。此ノ弊ハ、平安時代ノ初メニ當リ、既ニ頗ル著シキモノアリシコト、類聚三代格卷八調庸事ノ部ニ載セタル延暦十六年八月三日ノ太政官符ニ、

應^ス徵^ス寄^ス住^ス親^ス王^ス及^ス王^ス臣^ス庄^ス浪^ス人^ス調^ス庸^ス事^ス、

右被^レ大^ニ納^ス言^ス從^ス三位^ス神^ス王^ス宣^ス傳^ス、奉^ス勅^ス、浮^ス宕^ス之^ス徒^ス、集^ス於^ス諸^ス庄^ス、假^ス勢^ス其^ス主^ス、全^ス免^ス調^ス庸^ス、郡^ス國^ス寬^ス縱^ス會^ス無^ス催^ス、徵^ス黎^ス元^ス、積^ス習^ス、常^ス有^ス規^ス避^ス、宜^ス令^ス國^ス宰^ス郡^ス司^ス、勘^ス計^ス見^ス口^ス、每^ス年^ス附^ス浮^ス浪^ス帳^ス、全^ス徵^ス調^ス庸^ス、其^ス庄^ス長^ス等^ス聽^ス國^ス檢^ス校^ス、若^ス有^ス庄^ス長^ス拒^ス捍^ス及^ス脫^ス漏^ス一^ス口^ス者^ス、禁^ス身^ス言^ス上^ス科^ス違^ス勅^ス罪^ス、國^ス郡^ス阿^ス容^ス亦^ス與^ス同^ス罪^ス者^ス、

トアルニ據リテ明白ナリトス。而シテ此ノ官符ニ於テハ諸庄ニ寄住スルモノヨリモ調庸ヲ徵スベシト嚴命シタルコトナレドモ、ソハ實際ニ行ハレズ、從テ規避ノ目的ヲ以テ人民莊園ニ集マルコトハ、此ノ後年ヲ逐ビテ愈々多ク、莊園ハ戶口益々充實シ、他ノ郷里ハ次第ニ凋衰スルヲ免レザリシナリ。勘仲記、弘安十年七月十三日ノ條ニ、崇德天皇ノ御世、大治二年五月十九日、淡路國ニ下サレタル太政官符ノ文ヲ載

ス。其ノ中ニ次ノ如キ箇條アリ。(七)

一應停止國內公民入籠莊園或稱神人或號莊民對捍國務事

(上略)謹檢案内神社佛寺權門勢家庄園占膏腴地不勤國役然間在々調丁好入庄内郷々民烟逐日減少何況宰吏得替之尅庄司招取公民或募權勢或假神威敢不還住皆爲莊民因茲庄家者連薨比棟郡郷者有地無人望請天恩被停止庄園左道者召返公民令致調庸之勤者(下略)

以テ大體ノ趨勢ヲ察スベキナリ。

(五) 租調庸ノ規定ノ詳ナルコトハ賦役令ヲ見テ之ヲ知ルベシ。

(六) 浮浪人ノコトハ早ク既ニ日本紀卷二十九天武天皇六年九月己丑ノ條ニ見ユ。元明天皇ノ和銅八年即チ靈龜元年五月ノ勅ニハ天下ノ百姓多ク本貫ニ背キ他郷ニ流宿シ課役ヲ規避ストイヘリ。當時既ニ浮浪人頗ル多カリシコトヲ察スベシ。又養老元年五月丙辰ノ詔ニ率土ノ百姓四方ニ浮浪シテ課役ヲ規避シ遂ニ王臣ニ仕ヘ或ハ資人ヲ望ミ或ハ得度ヲ求ムト云ヘル類以テ其ノ弊ノ早クヨリ著シキモノアリシヲ見ルニ足ル。

(七) 勸仲記載スル所大治二年ノ太政官符ハ栗田寛先生既ニ莊園考ノ中ニ之ヲ引用セラレタリ。栗里先生雜著卷十、八二頁以下、及九九頁以下(今本書ト莊園考引ク所ノ文トヲ對照シテ之ヲ校シ置ケリ)。

一方ニ於テ人民、莊園ノ地ニ集注スル傾向アリシト同時ニ、マタ他ノ一方ニ於テ人民畿内ノ地ニ集注スル傾向アリシコトハ、頗ル興味アル事柄ナリトス。カク人民、畿内以外ノ諸國ヨリ畿内ノ地ニ入り來ルモノ多カリシハ、何ニ由リテ然ル乎トイフニ、是レ畿内ノ地ハ、文化最モ開ケ、生活上ノ便利最モ多カリシノミニ由レルニハ非ズ、畿内ト他ノ諸國トハ租税ノ賦課ヲ異ニシ、負擔均一ナラザリシコト、其ノ一大原因ナリシナリ。令ノ制ニ據ルニ、京及畿内ノ人民ヨリ徵收スル調ノ額ハ、他ニ比シテ特ニ半ヲ減ジタルコトニシテ、而シテ其ノ上ニ京、畿内ノ民ハ庸ヲ全ク免除セラ、ルハ、ノ特典ヲ有シタリキ(八) 續紀卷三、慶雲三年二月庚寅ノ條ニ據レバ、此ノ時ニ令制ヲ改メ、京畿内ハ人別ニ調ヲ出サシムルコトヲ罷メテ、特ニ戸別ノ調ヲ輸サシムルコトハナリタルコトナルガ、此時ノ詔ニモ乃^チ異^ニ外邦之民^ニ以^テ優^ニ內國^ノ之口^ヲノ文アルヲ見ル。茲ニ外邦トイヘルハ、畿外ノ國々ヲイヒ、內國トハ畿内ヲ指示セルナリ。此ノ如ク畿内ニテハ、庸ハ免除セラレ調モ亦其ノ負擔輕カリシヲ以テ、畿外ノ民課役ヲ免レント希フモノ、畿内ノ地ニ向フハ自然ノ勢ニシテ、之ヲ抑止スルコト甚ダ難カリシ也。夫レ畿内ノ地ハ當時ニアリテモ人口比較的稠密ニシテ、早ク既ニ地狹ク

人多キノ狀態ヲ生ジタリ。故ニ京畿ニアリテハ、令制ノ如ク男女及奴婢ニ至ルマデ、總テノ現在人口ニ對シテ口分田ヲ班給セントスレバ、田地ノ分量足ラズ、是ヲ以テ桓武天皇ノ延暦十一年ニハ、京畿ノ百姓ニ田ヲ班ツヤ、男ニハ令制ニ依テ給スベキモ、女ニハ其ノ餘ヲ以テ之ヲ給シ、奴婢ニハ支給セズト定メラレタルコトナリキ(九)右ノ如キ有様ナルニモ關セズ、前陳ノ理由ヨリシテ、畿外ノ人民京畿ニ貫スルモノ多ク、當時京畿ニ向ツテ所謂人口ノ求心的移動 *Zentripetale Bewegung* アリシコトハ、類聚國史卷百五十九、延暦十九年十一月庚申ノ勅ニ、

都鄙之民、賦役不同、除附之事、損益已異、今聞外民挾奸競貫京畿、隱首括出、二色是也、非唯增口貪田、實亦冒名假蔭、如不改轍、何絕詐僞、自今以後、一切禁斷、莫預班田、
イヘルニテモ、能ク之ヲ徵スルコトヲ得ベシ。(一〇)

(八) 賦役令ニ調ハ正丁一人ニ布二丈六尺ト定メ、而シテ京及畿内ハ皆正丁一人ニ調ノ布一丈三尺ト云フ特例ヲ設ケタリ。即チ京畿ノ調ハ他ニ比シテ半額ナリトス。又庸ニ就キテハ京畿内不在收庸之例ト云フ明文アルヲ見ルナリ。但シ細カニイヘバ、全體ノ負擔ノ上ニ於テ、京戸ト畿内ノ百姓トノ間ニ於テ、マタ自カラ不均一アルヲ免レザリシモノ、如シ。即チ三代實錄卷三十六、元慶三年十二月四日、藤原冬緒ノ奏狀ニハ、畿内、

百姓、雖貢賦輕シト於外國而徭役重シ於京ヨリ戸トイヘリ

(九) 類聚國史卷百五十九、口分田ノ部、延暦十一年十月庚戌ノ條ヲ見ヨ。

(一〇) 尙ホ此ノ事ニ就キテハ、類聚三代格卷十二、隱首括出浪人事ノ部ニ載セタル大同

元年八月八日及齊衡二年三月十三日ノ太政官符、宜シク參考スベシ。又同書卷十九、禁制事ノ部ニモ之ニ關シ、寬平三年九月十一日ノ太政官符ヲ載セタリ。ソハ應禁制外國

百姓奸入京戸事ト題スルモノニシテ、其ノ中ニハ年來外國百姓或賄小吏而貫京畿或

賂戸頭而冒氏姓卽是格制雖存於前有司尙緩於後之所致也ノ語アリ。

更ニ降リテハ延喜二年三月十三日勅旨開田等ヲ停止スヘキ旨ノ太政官符中ニ於テ

吾人ハ諸國奸濫百姓爲過課役動赴京師好屬豪家ノ文アルヲ見ル。サレバ諸國ヨリ人

民課役ヲ逃レンガ爲メニ京畿ニ入り込ム傾向ハ頗アル長キ間引續キテ存在シ、朝廷

屢々令シテ之ヲ抑止セント企テタリト雖、充分ニ效ヲ奏スルコト能ハザリシナリ。

右ノ如クニシテ、京畿ノ地ニ入り込ミ來リタルモノハ、畿内ニ近キ國々ノ人民ノ

ミナリシヤト云フニ、決シテ然ラズ、遠ク陸奥出羽等ノ國々ヨリシテ、遙々畿内ニ來

リ、京ノ内ニ浮宿セルモノモ尠カラザリシガ如シ。カハル輩、京ニ在リテ、官司ノ注意

スル所トナリシコトハ、類聚三代格卷十二、隱首括出浪人事ノ部ニ載セタル寬平五

年七月十九日ノ太政官符之ヲ證シテ餘リアリトス。其ノ文左ノ如シ。

應搜括逃人還向本郷事、

下中上

右得^ル陸奥^ニ國^ノ解^ヲ僞^ニ、檢^{スル}案^ニ內^ニ被^ハ太政官^ニ去^ル天應二年閏正月二十六日下^{セル}左右京職符僞^ニ、陸奥出羽人在京者、不別雜色、皆還本鄉、寔是豐邊戍備外禦之術也、此事中停不用^ル、有日、興言於今、理尤可行、職宜承知、自今以後兩國人仕王臣家及浮宕京內、能加搜括^ニ、隨得且申^ス若有脫漏及相匿者、不論多少、科違勅罪者^ニ、(下略)

以上述べタル所ニヨリテ、我國中古ノ時代ニハ、第一人民莊園ニ集注スル傾向アリシコト、第二畿內以外ノ國々ノ人民、京畿ニ入り込ム趨勢アリシコトハ、粗分明ナリト信ズ。右ノ外、中古ノ世ニ於ケル人民移住ノ事實中、特ニ注意ヲ値スルモノハ、當時ニ於ケル主要ナル殖民地域、即チ奥羽地方ヘノ移民ノ顛末ナリトス。是レハ多少ノ詳細ニ論ズル必要アルヲ以テ、次ニ項ヲ改メテ之ヲ説カン。

(補遺) 栗田先生ノ莊園考(栗里先生雜著卷十、三八頁)ニかくて稱徳帝の時、朝廷にも其弊を察して、加墾を禁斷し、國司の田園を營みて、農地を妨げ民利を奪ひ、浮宕百姓の王臣庄家に入て、調庸を遁るゝ事を制せられきト記サレタルハ、前後ノ

コトヲ續ケテ併セ叙セラレタルモノ、如シ。先生ガ引カレタル續紀卷二十六、稱德天皇天平神護元年三月丙申ノ條、及之ト參照スベキ類聚三代格卷十五、寶龜三年十月十四日ノ太政官符中ニ引ケル天平神護元年三月六日諸國ニ下セル官符ノ文中ニハ、浮宕ノ百姓調庸ヲ逃ル、爲メ王臣ノ庄ニ入ルコトハ、未ダ見エ居ラザルナリ。サレドモ三代格卷十二、寶龜十一年十月二十六日ノ太政官符中ニ出デタル伊勢國司ノ解ニ被驅王臣之庄、徒免課役之務ノ語アルニ據レバ、王臣ノ庄ニ使役セラル、モノ課役ヲ免ル、ノ事實ハ既ニ奈良時代ヨリ存シ、浮宕ノ民、莊園ニ集ルノ勢、早ク成レルコト、得テ否ムベキニ非ズ。

畿内以外ノ國々ノ民、課役ヲ遁レンガ爲メニ京畿ニ入り來ルモノ多カリシコトハ、本文ニ述ベタル如クナルガ、之ト反對ニ京畿ノ百姓課役ヲ遁レントテ畿内ノ以外ノ國々ニ出デ行クモノモ亦多カリシガ如シ。續日本紀卷二十三、天平寶字五年三月甲辰ノ條ニ。

京戸、百姓規避、課役浮宕、外國習而爲常、其數實繁、各在所_ニ占著_、給其口田_、

トアル、以テ之ヲ徵スベキナリ。コレハ所謂遠心的ノ移動 Zentrifugale Bewegung ニシテ前者ト反對ノ傾キヲ有シ、コレニ由リテ前者ノ働キノ效果ヲ或ル程度マデ減殺シ、來住ニヨリテ京畿ノ人口ノ急速ニ増加スルコトヲ緩和ナラシメシナラント思ハル、ナリ。

來住ニヨリテ京畿ノ人口ガ異常ナル増加ヲ來スコトヲ抑止セシ他ノ一因由トシテ京畿ニ住スル貴族、官人等、其ノ子弟、從者ヲ率キテ、任務ノ爲メニ地方ニ赴キ解任ノ日ニ必ラズシモ皆、京ニ還ラズ、其ノ子孫、從者等留マリテ其ノ國ニ土着セルモノ少カラザリシコトヲ舉グルコトヲ得ベシ。又京人ノ子弟、或ハ婚姻ニ由リテ外ニ出デ、或ハ農商ヲ業トシテ、所謂外國、卽チ畿内以外ノ國ニ居住セルモノモアリシコトヲ忘ルベカラズ。是レハ寛平三年九月十一日ノ太政官符ニモ明記スル所ナリ。サテ此等ノ輩、地方ニ住スルモノ屢々黨ヲ結ンデ村里ニ横行シ、或ハ官吏ニ佞媚シ、若シクハ之ニ對捍シ、或ハ百姓ヲ威シ脅カス等ノコトアリシヲ以テ、此ノ寛平三年ノ官符應レ檢ニ括ス事ト題セリニ於テハ、此等ノ徒ニ對シ嚴ニ糾察ヲ加フベキ旨ヲ令日ノ太政官符應レ檢ニ括ス事ト題セリニ於テハ、此等ノ徒ニ對シ嚴ニ糾察ヲ加フベキ旨ヲ令

第五卷

(三九四)

論說

日本古代ニ於ケル人民ノ移住ニ就キテ

第三號

(九〇)

セリ。又寛平七年十一月七日ノ太政官符ハ、五位以上ノ前司、本任國ニ留佳シ、竝ニ
輒ク畿外ニ出ヅルコトヲ禁ジタリキ。然レドモカ、ル制限及檢束ハ充分ニ其ノ
實行ヲ見ル能ハザリシヤ、疑ナキナリ。(未完)